■第２章－瓦について■

四天王寺の塔の周辺からは、吉備池廃寺（きびいけはいじ）と同笵（どうはん）の単弁八葉蓮華文軒丸瓦（たんべんはちようれんげもんのきまるがわら）が出土します。

単弁蓮華文は、大小の花びらの重なりを子葉（しよう）で表わし、立体的な蓮弁表現であること、蓮弁の先が宝珠のように尖っていること、蓮華文の周りに重圏文（じゅうけんもん）が巡ることが特徴です。

これらの軒丸瓦の瓦当文様（がとうもんよう）は、奈良県桜井市にある山田寺が祖型と考えられています。

山田寺は、『上宮聖徳法皇帝説裏書』（じょうぐうしょうとくほうおうていせつうらがき）の記述や、瓦の製作技法から、蘇我石川麻呂によって 641 年に造営が開始された寺であることがわかっています。

吉備池廃寺の軒丸瓦は、山田寺の創建年である 641 年よりも古い年代が考えられるため、639 年創建の百済大寺（くだらのおおでら）の有力候補とされる根拠の一つとなっています。

四天王寺の軒丸瓦は、吉備池廃寺から笵が移動して製作されました。

640 年代後半から 650 年代、つまり、阿倍左大臣によって塔が荘厳（しょうごん）された頃です。

次に笵が移動したのは、畿内最南端の寺、海会寺（かいえじ）です。

海会寺の北側には、古代の幹線道路である南海道が想定されており、畿内と紀伊を結ぶ交通の要衝であったことがわかります。

日本書紀には、７世紀後半代、東北の蝦夷などの辺境の民に対する服属儀礼をおこなった記事が多数見られ、天皇中心国家に向けて国内の広域支配が重視された時期です。

海会寺に百済大寺の瓦が採用されたのは、そういった広域支配の拠点をおさえるといった意味があったのかもしれません。